

毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第 8 卷 第 4 号

1963年4月25日



ライチョウの集団(4月3日)爺ガ岳にて

撮影 高橋秀男

大町山岳博物館

爺ガ岳雷鳥調査行 (1)

平 林 国 男



40日の調査行を終了して 右より平林、矢口教育長、山下一士、高橋隊長、佐藤一士、千葉の各隊員

下山の日

「さあ、出発するか」小屋内の最後の点検を終った高橋隊長がつぶやくように云いながら、種池小屋の二階の小窓からヌツと足を突き出した。二階建の種池小屋はまだ冬姿のまゝだ。4m余の積雪にすっぽりと埋もれた種池小屋からただ一つの出入口として、小窓の扉を上へ押し上げてはもぐり込み、あるいは這い出して暮した小窓が閉じられた。

調査を打ち切ってひさしぶりに下界にもどる4月21日の朝である。一面巻層雲でおおわれた爺ガ岳山頂のあたり、雲海から離れたばかりの太陽が寝ぼけまなこでのぞいている。

40cm四方しか無い小屋の小窓は大きな荷物の出し入れが出来ない。小屋の中でザツクの中へ荷物を詰め込むと屋外へ出すことができなくなる。そこで一旦屋外の雪上に搬出された梱包を各人思い思いにパッキングする。

午前6時下山の準備を終りし荷物の点検やパッキングが終った調査隊5名と荷下げのための支援隊9名の総勢14名のパーティーはそれぞれ35kg前後の荷物を肩に種池小屋を出発し帰途についた。

一行は爺ガ岳南峰から山頂近く扇沢斜面の腹をまいて爺ガ岳南峰から

派生した南尾根にとりつく。40日間生活を共にした種池小屋、そして毎日踏みしめた爺ガ岳の岩と雪とハイマツ群落の斜面から一步一步離れていく。

南尾根の森林限界を過ぎて針葉樹の林に入ると一行のピッチがにぶった。3月12日始めて入山した頃に較らべると、すでに春山の様相となっている森林の中は歩きにくい。雪が消えた部分はブツシユがからみ合ってヤブコギに難儀する。雪の上を歩くと腐った雪のために太腿のあたりまでズボツズボツともぐり込む。

歩きにくさに加えて荷物の重量によって体のバランスが乱され転倒する者が続出する。一度転倒すると立ち上がるのに苦勞する。足場が悪い上に荷物がすこぶる大きく重量があるため、背負い易い場

所まで荷物を運搬して本式に背負いなおさなければ立ち上れない。入山の日には膝までもぐる新雪で苦勞した。下山の今日は腐った旧雪で悩まされる。

予定時間より約2時間遅れて一行は扇沢へ到着した。直ちに迎えの車に分乗して一路山岳博物館へ向かう。

山博の庭へ降り立った時、これで一応調査行も終わったのだという感じにせまられる。雪景色に見送られて出発した博物館の前庭はすでに三分咲きの桜の花に色どられている。毎日むさくるしい調査隊員につらつき合わせて暮した目には、花見に来ている女性のスカート姿がまぶ



調 査 地 爺 ガ 岳



3月13日 吹雪の中を基地に向う
しい。

思えばたった40日間の短い調査行であった。しかし大町山岳博物館にとって冬の山小屋へこもりきりで仕事を進める越冬観察は今回が初めてのころみであった。

山博協議会での調査実施の決定から、いやそれ以前の調査費をさがす段階また調査開始と調査後の跡仕末まで一連の調査活動の流れの中に、地方の小博物館の仕事として宿命的にまつわりつく幾多の問題や障害が生まれよう曲折しながらもどうか一応の仕事を完結させることができた。

博物館というもの自体なかなか世間の人々から理解してもらえず、ままた日の当らない社会の片隅となって低調をきわめている日本の博物館界の現状にあって、雷鳥の生態調査などという地味な調査研究活動がまがりなりにも実施でき不明であった雷鳥の冬の生活の姿が把握でき、また保護増殖の手立てや野外観察教育上の資料が収集できたのは何に負うところがあるのだろうか。

大きくいえば長野県の皆さん、さらに山博の設立母体となつてくる大町市民の皆さんの、心からの理解と支援によるものと考えている。また調査基地と山博本部の連絡のための無線関係を心よく引き受けさらに調査隊員の不足をおぎなつて直接調査活動に従事してくれた陸上自衛隊第12師団第13普通科連隊の積極的な応援。あるいは調査活動をスムーズに運ぶために直接的な労力奉仕をおし、支援隊員として参加してくれた大町

山の会の会員諸氏、白馬村案内人組合、大町案内人組合の各位、また調査基地となつた種池小屋を喜んで提供してくれた柏原氏、物資空輸に当られた朝日ヘリK・K、およびしい会の予算の中からフィルムや調査器具など提供してくれた信大教育学部生態研究会、その他直接間接に援助して下さいました多数の人々の善意と友情と支援に支えられ全員無事に仕事を終ることができたと考えている。

今ここで昨日のこのように思い出される調査行をふり返り、調査隊員の脳裏にはさまざまな映像がかけめぐり、それぞれ懐しい思い出や仕事の上での反省があることだろう。私はここでそれらの過程をふり返り私なりの懐古と反省をつづつてみたい。

雷鳥調査にたくす夢

大町山岳博物館が雷鳥調査にたくしている夢は大きい、ただたんに雷鳥生態調査だけの目的であつたらそれ程大きな表現にはならないだろう。

すなわち山博創設の理念である「自然を科学しつゝ深く楽しむ風潮を助成し、またその自然を守り育てて行く保護思想を高める」といった目標のもとにその足がかりの一つとして雷鳥調査が取り上げられているからである。特別天然記念物に指定され保護されている雷鳥であるが近年とみに上昇の一途をたどっている登山熱や観光開発に伴つて彼等の狭い生活圏はさらにせはめられ、その生活が侵害されている。しかし保護対策は公私をとわず皆無であり、また保護の手立てを求める生活実態の解明は殆んどなされず不明のままである。こんな現状ではとても雷鳥の保護はおぼつかない。

ところで雷鳥は本州中部の山岳地帯に大部分の分布域を持ち、大町山博の立地である大町市、さらに広くは長野県の山岳にその大部分が含まれている。国家で保護施



3月14日 燃料、器材をつんだヘリコプター到着



出入口の窓を掘る

策をしない現状ならば、雷鳥の棲息する地域に生活するわれわれ住民がこれらの問題と取組まざるを得ない。その足がかりとなり得るのは大町山岳博物館以外に無いだろうと考えている。

一方、博物館法の第三条に当該博物館の所在地又はその周辺にある文化財保護法の適用を受ける文化財について解説書又は目録を作成する等一般公衆の当該文化財の利用の便を図ることとなっている。しかし雷鳥についての資料があまりにも不足しているため一般公衆に雷鳥そのものを理解してもらい、保護思想を普及する上で常にこと欠く状態であった。

大町山博では博物館活動を進める上でも雷鳥に関する諸資料を早急に収集しなければならない必要性にせまられていた。

また大町山博の長年の宿願である針ノ木岳周辺の野外教育センターとしての開発のために、その一環として考えている雷鳥生態園の実現のためにも生態調査による資料の収集は欠すことのできない仕事であった。

雷鳥の生活実態がつかまれることによって、それがそのまゝ生きた教育資料となって活用できる。また構想されている雷鳥生態園が実現されることにより、そこを訪れる登山者は自由にいつでも観察路をたどり解説板を読むことによって、雷鳥の抱卵、孵化、育雛など生活史の各期に応じた生活の姿を直接観察することが可能になる。雷鳥の生活実態に接したいと願う登山者はこうして造物主の巧みな技巧に目を見はることであろう。

また、高山現地で増殖されさらに人工的な餌によって馴致された雷鳥は登山者のまわりにまわりついて、旅情をなくさめ自然物に対する関心や保護の必要性はごく自然な姿で理解してもらおうことができよう。

夏期調査の苦闘

大町山博の雷鳥調査計画は昭和34年に立案された。生

活史の基礎的な調査から高山現地の保護増殖、人工蕃殖、餌付けによる馴致などを内容とした5ケ年の計画であるが大町市当局は赤字財政で苦しみ、山博予算は維持管理がせいっぱいで調査関係の経費は一際認められない状態であった。

調査費の獲得をめざして運動が展開され、山博顧問のH氏を中心として日夜各方面へ交渉が続けられた。

たまたま昭和35年12月に財団法人長野県科学振興会から30万円の研究助成金の交付が決定し、計画の一部を実施できることになった。

こうして昭和36年5月から北ア動物生態研究グループ(山博職員、山博調査員信大学生で構成)が中核となって夏期の蕃殖期を中心としたと生活史調査が開始

された。

しかし夏期の調査活動は少ない調査費にしばられ非常に苦しい仕事となった。もともと生活史の調査は莫大な人員と労力を必要とし、それなくしてはより多くのより良い成果が期待できない。少ない調査費で最大の効果をあげるべく、信大の学生の奉仕的な活動と山博職員の苦闘が続いた。



小屋内で調査打合せ



調査中の隊員

こうして調査は昭和36年10月まで爺ヶ岳を中心に続けられ、繁殖期を中心とした雷鳥の生態を明らかにすることができた。しかし生活史の調査は年間調べられ初めて明らかにされるものであり、冬期の生態は大町山博が雷鳥にたくした夢の実現のためにどうしても解明されなければならぬ問題であった。

昭和37年は冬期の調査費をさがすための陳情や交渉に明けくれた山博顧問のH氏や文化的な活動に理解の深い県会議員のT氏など多数の人の理解ある協力によって昭和38年1月長野県教育委員会の社会教育委託費として冬期の雷鳥調査費80万円の県費補助が決定した。

帯に短かしタスキに長し

こうして県費を載けることになったが、ここで困った問題が生じた。調査計画案のうち雷鳥の冬期生活史調査の項の調査期間は12月から5月までの6ヶ月。出動計画としては調査隊員が山小屋へこもって越冬態勢で仕事を進める予定であった。常時入山の隊員は5人として調査費は、旅費、備品費などすべてを含めて154万円を見込んでいた。

普通冬山の登山準備は夏のうちにコースの下見から設営地の選定など、半年位前からじっくり準備するのが常道である。山頂へ立つ目的の登山の場合でさえこのような周到な準備が必要である。ましてその山頂で調査を進めるとなれば念には念を入れた準備がなされなければな

らない。また早くからこの補助金が決っていたら越冬準備のため秋のうちに荷上げをして準備することができたが、荷上げの経費も冬期の場合の3分の1位におさえることができる。

補助金が決ったことは有難かったが時期から云っても予算からみても中途半ばなものであった。

調査隊員の選定にも苦しんだ。山博の職員は6名いるが動物飼育施設の管理から展示あるいは教育普及活動など幅広い活動を内容としている山博にとって、日常の運営だけでせいっぱいの人員である。本館を閉鎖して全職員が山へ入るわけには行かない。昭和37年の夏季調査の際にも信大教育学部生態研究会の全面的な応援があったから仕事のできたのである。

冬期調査の計画も信大学生の応援を予定して立案されていた。しかし予算の目とがつかないままですると1年も経過していたため、信大学生はそれぞれ別のテーマに取り組んで研究を進めていた。急に金が間にあったからといってテーマを変更して雷鳥調査に取り組んでもらいたいと云うのは勝手が良いすぎる。

調査時期、調査費、調査隊員の問題など困った問題が錯綜して実施すべきか中止すべきか連日夜遅くまで議論がつづけられた。席上せっかくきまった好意の補助金を返還したらなどという極論まで突び出した。

結論を得ないまま数次にわたって山博協議会や教育委員会がもたれ審議が続けられた。委員の大多数は予算確保困難と危険性を考慮して慎重意見が多かった。調査計画案は何回もねりなおされ補助金以外に確保できる市費を加え、最も効果的に最大の成果が得られる時期を研究してぎりぎりいっぱい調査期間に短縮した実行案が作られた。

一方調査員の不足と無線連絡の問題を解決するために陸上自衛隊松本部隊に協力方の要請がなされ、自衛隊の積極的支援が得られることになった。

(山博学芸員)



南アルプス植物雑感

中村武久

5 南アのもう一つの魅力

いうまでもなく南アルプスは、北アルプスのそれとはまた違った、山岳としての形態性質をそなえており、北アに好んで登る人もまた南アに登れば北アでは感じられない南アの魅力にひかされるに違いない。

もちろん私もここ数年来、年中行事の一つでもあるかの如く夏が訪れると南アの山に足を運んできたが、矢張りいまだにその「山」としての南アルプスにおおいに心寄せている。しかし決してアルピニストとしての山行きを行っているのではないから、そんな大げさな方をするとそのすじの方々からお叱りを受けぬとも限らないから、山岳としての南アルプスの魅力については程々にしておきたい。

ところで私がこうして毎年南アルプスへどうして出かけるのかというと、いうまでもなく植物をながめることくらいしか能のない私にとっては、矢張りその植物にひかされて、楽しいところか重い荷物を背負って苦勞な山行きをくり返しているのである。南アルプスの植物のよさについては先号でも時々触れた通りであるが、たしかに私にとって、北岳の東斜面、決して北アのお花畑に劣らぬ大規模な高山草原、そしてその中に咲く南アの香り高い花々、尾根に近い辺り岩の所々露出する中にタカネピランヂ、タカネマンテマ、キタダケヨモギやハハコヨモギ、座っていても罌りに4・50種はすぐ数えられる。それどころか特に私にとって最も関心の向くところは、この南アルプスが本邦第一の高山シダの豊庫であることだ(後述)。

斯様に私は南アルプスの魅力は、もちろんその山岳にもあるであろうが、何んといっても第一は植物にあると考えている。といってこのことはいまままでに何べんもくり返してきたことで、いまさら書きたててみるつもりはないが、実は近年これとは別のもう一つの魅力があることに気がついたので紹介しておきたい。

私がこれまで植物にひかれて南アルプスを歩いたのは大たい仕事の関係で8月中旬か時には9月に及ぶ頃で、いずれにしても山はすでに秋色立ち始めている頃が多かった。これは今から三年前1960年の8月、山博の高橋学芸員、国立科学博物館の小林峯生氏、それに私の所の大学の学生2名を加えて、北岳から間ノ岳、三峯岳、北荒川、塩見岳、三伏峠と南ア北部の山をかなりゆくりした日程で歩いた折のことである。台風の去った後の晴れあがった気持ちよい天候に恵まれ、のんびりした植物調査を続けながら、とき折中腹または尾根すじの灌木の中に現われるクロウソゴやクロマメノキの実をつまん

で口の罌りを紫にそめる。ときには南アのお花畑によくみられるシロバナヘビイチゴも、8月の中旬を過ぎるとちょうどオランダイチゴを思わせるかわいい実を葉のかげに沢山つけている。殊に北荒川岳のそれはまことに見事なものでまさにお花畑ならぬイチゴ畑といっても決して大げさではないくらいの大群落、東京辺りで時季はずれに果物屋の店頭で一箱買えば200円300円とられるしるものが、ここでは二箱食べようが三箱食べようがすべて只である。味もへたなオランダイチゴよりはるかに美味いし、云うまでもなく採ってすぐ口に放り込むのだから、これほど新鮮なものはない。ただ残念なことはあわててこれをやっている最中時折イチゴの実ならぬ昆虫と一緒に放り込んでしまうことだ。その点さき程のクロウソゴやクロマメノキの実とは殆んどそういうことはない。全く虫が喰わぬ訳もなからうがそもそもこの仲間はその葉が昆虫の食草らしく、果実の方は小鳥の餌になっているようで、自然はなかなかうまく食べ物を分けあっているようだ。

さてこのクロウソゴやクロマメノキの仲間即ち *vaccinium* の類は秋になると黒紫色の果実をその枝に沢山つけ、形の大小は種類によって多少の違いがあるが、いずれも果実の頭に花形のもようないしは稜がある。そして他の産のものは知らないが少なくとも本州中部、北ア山中、南ア山中のものは皆食べられるようだ。殊にここ南アルプスにはクロウソゴ、クロマメノキ、スノキ、オオバスノキなどこの *vaccinium* 類が多く、殆んどの山塊の高山帯下部から亜高山帯の灌木または森林中に低い数となつて必らずみられるといつてよい。

確かこれは塩見岳の下の本谷山にかかる辺りだったと思うが、この類が林下面に黒々とその実をつけているのを目の辺りにし、我れ先にとザックを放り出して時間のたつのも忘れて指先きと口を動かしていた。そのうち誰いともなく、「おいここで食べてしまわず、沢山集めていつて今晚の楽しみにしようではないか…」という訳で、もっていた飯盒にいっぱいつめて夕暮れに三伏小屋についた。食事の用意をする一方、その採ってきた実を救急用にもっていたガーゼの中につんでしまひ、水を足し砂糖を入れ、且つその中にとっておきのトリスを一本混入したところ、まさに天下一品、本場のブドウ酒といえども比較にはならぬ我等の *vaccinium wine* ができあがったのである。 *vaccinium* の類は何もこの南アルプスばかりでなく他の山地でもよくみられる植物だが、私の知る限りではこの南アをしのぐ産地を他に知らない

(山博学芸員、東京農大第一高校教諭)

長野県 安曇地方の民話 (その4)

青木 治

佐々成政の残した地名

佐々成政^{註1}がその所領富山を出発し、後立山連峯を越えて信濃路に入ったのは、戦国時代の末の天正12年12月22日の事です。彼は豊臣秀吉と争うために織田信雄と結んだが利がなかったため、更に信雄と同盟関係にあった遠州の徳川家康と連合するため、当時対陣していた加賀の前田利家と急に和睦し、病と称し潜かに主従数名をしたがえ立山の姥堂に参詣し前途の難路の恙がないのを祈願しました。ついで御堂の姥尊像を乞いゆづりうけ従者に背負わせて黒部の溪谷を渡り後立山連峯にかかりました丁度厳冬のことであり積雪も深く実に困難をきわめました。彼は大町の眼前にうかぶ雄峯連華岳の南の北葛岳(七倉岳)を越えて七倉の難所に出てかろうじて^{註2}北葛沢に下り平区の大出に出ることが出来ました。それで彼が越えた七倉岳の肩を昔は^{註3}佐良佐良峠といひ、ざら峠とか、佐々峠とか呼んでいます。又その岳を乗越といひ彼が越えて来たことを意味し大出より4km高瀬川の上流、今の東電第3発電所のある笹平は佐々平で成政が辿りついた平という意味です。附近に笹の多いのも成政のせいだということです。また七倉岳の前山に鳩峰というところがありますが、これは成政が七倉岳の難所に出て進退窮まった時に鳩が飛んで来てこの山に下りたので人里の近いことを知り力を得て北葛沢を下ることを得たといひます。この七倉の嶮は遭難のあったことも

ありますが、越中側から来れば容易な路で七倉岳への自然のコースであるが、峠を越せば七倉の嶮の上に出るので容易に信州側を下ることは出来ません。尚大出の西の原を親の原というが、成政が漸く平地に下りることを得て初めて土地の人にあらうことが出来たので、恰も親の原(両親の原という意味)へついた心地がするといひたのでこの名があるといひ伝えられています。成政は大出でその姥尊を村人に寄進してよく祀るように教え、今度の旅が秘密の旅である故内密にすべきを言いおいて遠州路に向いました。大出の村人達はその後33年後の元和3年に改めて堂宇を営み盛んに法要をして姥尊を安置しました。それが今の西正院です。姥尊については次のような話もあります。それは元和3年8月26日の夜西方の空が急に明るくなって金色の光が赫々として飛んで来て大出の里におちた。奇異な感に打たれた村人は翌日その場所へ行って見たところそれが姥尊像であったので驚いて堂宇を営んで祀ったということであるこれは成政が内密にせよという言葉に応じてこの様な話で代えて村人が流布したものだともいひます。

註1. 7巻11号(その2)参照 註2. 北葛沢は中々下れぬと思われるが。 註3. 今の地形にはびったりしていない。 註4. 北安曇郷土誌稿第1輯による。

(大町高等学校教諭)

暖風

ハクチョウはいつ孵える?

昨年3月27日、皇居外苑より大町市へ贈られたコブハクチョウ一つがいは、木崎湖北端の飼育池において、その後順調な發育を続け、去る3月初旬より巣作りを開始、4月21日までに4卵を産卵しました。それ以来、メスは朝夕の採餌時以外は一日中巣に就いて抱卵を続けています。オスは専ら外敵の警戒に當っており、観覧者が池の端を歩くと、一時も離れず、羽を逆立て、尾行するなど全くけなげな努力です。

ハクチョウの抱卵期間は35日~39日とされていますが、皇居外苑で初めて産卵を見た昭和30年の例では、孵出までに44日あるいは50日という長期間を費しています。これは主として、外来客や報道関係者によるひんぱんな写真撮影の影響で、ハクチョウが落ちついて卵を抱けなかったためだと云われております。木崎湖のハクチョウが、みなさんの暖かい見守りの中で、5月末日頃、めでたく孵出することを願っております。

インスタント野外劇場など

今年のお花見シーズンは、カモシカ園開園と、観光望遠鏡除幕式で華やかに幕をあげた。山岳博物館の庭はいわゆる大町公園であり、市民の唯一の憩いの場でもあるので連日花見客でにぎわった。家族でゆっくり楽しむ人が例年より減ってしまい、紙クズ空かんの散乱は少しも減らない。ビール瓶を石にぶつけてメチャメチャにわって帰るといふ悪質で念の入ったいたずらが毎年後を断たないが、マイクで呼びかける注意が効いたのか客層が良くなったのか年々少なくなっては来ている。花も見頃を過ぎた或る宵、市内のK氏の要請で山博のマイクが庭に出た。インスタントのど自まん大会である。酔客が代るがわるマイクを手にしてシブイのどを披露した。見ていてヒヤヒヤするのが、雷オートバイである。山博までの急坂でカーブの多い一本道をオートバイレースのように車を連ねてふっ飛ばすのである。

博物館だより

ライチョウ調査終る

4月21日 北アルプス爺ガ岳(2669m)一帯の積雪期ライチョウ調査隊は、41日間の調査を終了して無事下山本館と調査基地、種池小屋との無線連絡を支援していただいた自衛隊松本部隊、及び食糧、調査器材の運搬にご援助いただいた支援隊(大町山の会、大町地区山案内人組合、白馬村山案内組合)信大教育学部生態研究会その他の皆様方に厚くお礼申し上げます。

カモシカ放養施設へ

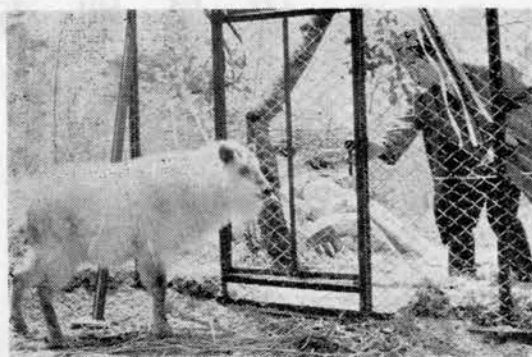
4月27日 新設なった放養舎(約900平方メートル)に、岳子、メス8才を放した(写真上)

観光望遠鏡設置

4月27日 大町市青年商工会(会長 北沢利夫氏、会員58名)は本館庭に26万余円で観光望遠鏡を設置除幕式が行なわれた。この望遠鏡は大町市に寄付され、管理は本館ですることになった。倍率20倍で北アの山々のケルンが見えるほどで本館を訪れる多くの人々の目を楽しませてくれるに違いない。(写真下)

こどもの日無料開放

5月5日 こどもの日は市内小中学生に本館を無料開放したところ約1000人が来館、各部屋の係員の説明を聞きながら楽しい1日を過ごしていた。



ヒヨドリ

長沢 修介

カタクリの花が絨たんを敷いた様に一面の紫でその甲にポツポツと咲き始めた二輪草の白がこの草原の静けさを一層美しいものにしてている。目をとじて春の芽香を胸一杯吸い込む、そしてそのまま倒れる様に草むらに身を託し春の息吹を身一ぱい感じよう。芽吹き始めたカラ松のうす緑の梢越しに見える山々はまだ真白であっても何処からか漂よう朴の香は間もなく緑に変わることを教えてくれる。ウグイスが身近かな笹やぶにきて一声二声と歌う。その歌声が静けさの中に余韻を残して又一層静けさを増す。ヤブサメが来て虫の様な声で歌う。時折、忘れていた歌を思い出して歌うようにクロツグミが渡来して間もないのか一節、一節と区切って遠慮がちに歌っている。

ヒヨドリが一羽目の前の柳の木に来て先程からしきりに虫をついばんでいる。まるで花に酔っているかのように一時じっと花を見つめていたかと思うと、蝶のようにひらひらと飛び上ってヒタキ科の鳥がするのように嘴をパチパチと鳴らして飛んでいる虫を食べる。そして又もとの枝へ何もなかったように静かに止っている。時折思い出して一声ピョーと鳴いてはみたがあまり静かなのであとは小声で何か囁いて又じっと静かに止っている。

すぐ近くにいる人間のことなどまるで眼中にないようだ。花の蜜を吸った虫を食べたのです。すっかり蜜に酔ってしまったのかも知れない。私も春の芳香に酔って眠くなってきた。遠くオオルリの声がのんびりと聞える。もう起きあがることを忘れたように私もこの草むらに眠ろう。



山と博物館 第8巻第4号 1963年4月25日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所

大町市上仲町

信州印刷大町工場